

さしまASで見学会 肥料利用の現場学ぶ

汚泥資源化協

日本下水汚泥資源化協会（吉村俊治会長）は5月20日、茨城県で「密閉型堆肥化施設見学会・講演会」を開催した。密閉型装置で汚泥を堆肥化する施設や、完成した堆肥を使い作物の生育に適した土壌となった耕作地と耕作地でとれたサツマイモの加工工場の見学、京都大学名誉教授の松井三郎氏による講演が行われ



堆肥を用いた土壌の展示

た。

さしまアクアステーション（利根左岸さしま流域下水道）の見学では、

密閉型堆肥化装置「YMひまわりくん」が公開された。同装置は、同処理場で発生する年間1825トンの脱水汚泥から、年間300〜400トンの堆肥を作る。臭気の拡散を防ぐ密閉型構造や、外胴回転で攪拌することによる省力化、高温の発酵熟による安全で良質な堆肥製造などによる、環境負荷低減や経済性、高品質性を確認した。

堆肥化の実施期間は令和9年3月まで。同処理場の指定管理者である共和・茨環・都市環JVが担当する。

これにより製造された堆肥「かんとりスーパーさしま」は、剪定枝や牛ふんを原料とする堆肥に比べて窒素・リン酸の含有量が多く、不快な臭

いがないのが特徴。地元住民に提供し、肥料の地産地消と安定的な地域農業の活性化を目指す。

また同堆肥を活用した資源循環モデルの事例として、和響エコファーム（原田大輔社長）が堆肥を利用した農場と農作物を加工した製品工場の見学を実施。農場では、4年間堆肥を施肥している効果が表れ、土壌が団粒構造となっていることが現地を確認された。

講演会では、松井氏が「下水汚泥堆肥は何が優れているか サツマイモ栽培の事例」と題して登壇。土壌や堆肥化に微生物の力を大きく借りていることを挙げつつ、「江戸時代の人々の生活は下水汚泥を堆肥として活用するパーフェクト・サーキュラー・エコノミーだった」とし、現代の技術力でこれを再び目指したいと展望を語った。